九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[059_2022]17世紀の日欧交流における医学と医療 図録

https://doi.org/10.15017/4842511

出版情報：展観資料. 59, pp.1-, 2022-10-06. Kyushu University Medical Library
バージョン：
権利関係：

九州大学附属図書館百周年記念
九州大学医学図書館グランドオープン

第59回 九州大学附属図書館貴重文物展示

17世紀の日欧交流における医学と医療

九州大学附属図書館
Kyushu University Library

展示会開催にあたって

九州大学医学図書館長　住本 英樹

令和４年（2022年）10月、九州大学医学図書館は大改修を終えリニューアルオープンしました。2022年は、九州大学に附属図書館が設立されてちょうど百周年に当たります。３階から１階に移設してアクセスが良くなった展示室において、記念すべきオープニングの展示『17世紀の日欧交流における医学と医療』を開催いたします。

今回の展示の中心となるのは、平成30年（2018年）にヴォルフガング・ミヒェル九州大学名誉教授にご寄贈いただきました「ミヒェル文庫」です。「ミヒェル文庫」は、医学・薬学・本草学関連の写本、板本、一枚刷りなど総数507点にのぼる古書群ですが、特に、17－18世紀の南蛮流医学（ポルトガル医学）・紅毛流医学（オランダ医学）関連の写本ならびに日本の薬草や医薬品に言及した同時代の洋書などは瞠目すべき資料です。受贈後、大改修をはさみ、満を持して、皆様へその一部をご紹介することとなりました。

日本における西洋医学の摂取は17世紀から本格化します。しかし、東西の医学・医療の交流は一方通行だったのではありません。中国医学を源とする東洋医学は、日本の独自性も加わった形で、日本から西洋へと伝わりました。このダイナミックな知の交流を理解する上で「ミヒェル文庫」は格好の材料を提供してくれることでしょう。この機会に、当時の人々の驚きと感動をそのままに、日欧交流を存分にお楽しみいただければ幸いです。

最後になりましたが、ヴォルフガング・ミヒェル名誉教授には、本展示の企画・構成、図録の監修・解説、さらには10月27日開催の講演会、とまさに絶大なるご尽力をいただきました。この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。そして、大改修で多忙を極める中、本展示を開催に漕ぎ着けることが出来ましたのは、医学図書館員の皆様の獅子奮迅の活躍によるものです。心からの敬意と謝意を表します。

令和４年10月６日

1 南蛮人の到来

イエズス会士ザビエルの来日から始まる日葡交流時代（1549－1639）において、文化交流の主な担い手となったのは宣教師と商人だった。宣教師の書簡（cartas）、年次報告、ルイス・フロイス神父の著書、長崎で印刷された『Vocabulario da lingoa de Iapam（日葡辞書）』などは、当時の医療活動に関する情報も伝えている。イエズス会に入る前に外科医の免許を取得し、貿易商をしていたルイス・デ・アルメイダ（Luís de Almeida, 1525?-1583）が豊後国・府内に設立した病院は日本初の西洋式病院として知られているが、むしろ西洋の外科と和漢の「内科」の共生の場として注目に値する。

しかし、このアルメイダの病院は天正15［1587］年に薩摩軍によって破壊され、次第に強まるキリシタン弾圧の中で、知識や技能の伝達のための継続的な交流は不可能になっていった。1589年にイエズス会日本支部の代表コエリョ神父は修道会長に宛てた書簡の中で「医師がいなくて、薬もなく、瀉血の方法を誰も知らない、迫害の労苦から修道会士がもう３人も病死してしまった」と嘆いている。その２年後に京都で病を得た宣教師ジョアン・ロドリゲスは治療のために700km 離れた長崎まで戻らなければならず、元和６［1620］年には日本人キリシタンが長崎で運営していた看病・介護施設「慈悲屋（casa da misericordia）」もすべて破壊されてしまった。

現存する和文資料の中で、府内の病院や「慈悲屋」に関連するものは一つもない。当時の西洋医療の痕跡は、断片的なものがさまざまな写本や印刷物に散見されるのみであり、それらのほとんどは17世紀に書かれたものである。

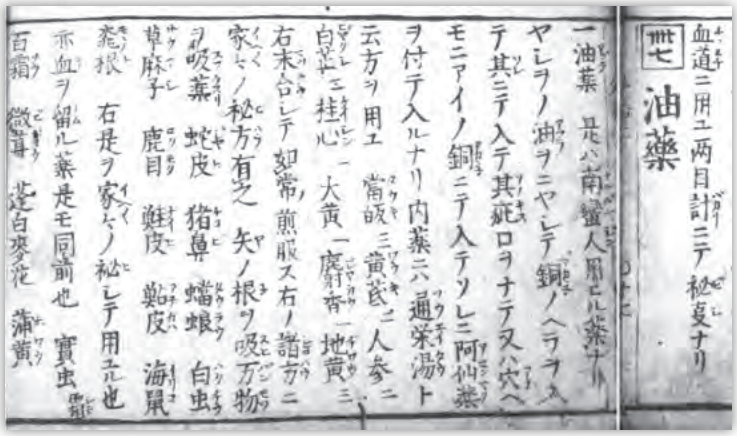


図１　南蛮人が用いる椰子油（「ヤシヲノ油」）を紹介する鷹取秀次（『外療細塹』慶長11［1606］年刊）

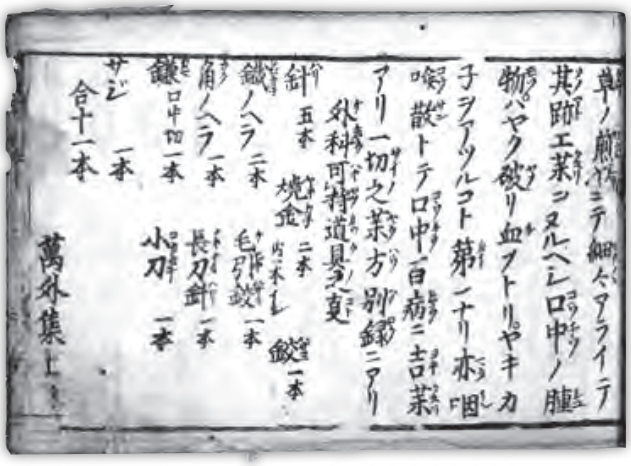


図２　山本玄仙著『万外集要』（元和５［1619］年序）に見られる焼き金

2 「南蛮流外科」

京都の儒医・黒川道祐は、寛文３［1663］年成立の『本朝医考』で国内の外科学を振り返り、金瘡治療と南蛮流外科を対比させているが、戦国時代から刀や槍による傷の治療にあたっていた金瘡医たちは、すでに当時からポルトガル人の智恵を借りていた。その様子を伝える最初の書物は、鷹取秀次の『外療新明集』（天正９［1581］年序）、『外療細塹』（慶長11［1606］年刊）および初の「南蛮流版本」とされる山本玄仙の『万外集要』（元和５［1619］年序）である。

金瘡医たちは「ポルトガル油」（オリーブオイル）、「ヤシヲノ油」（椰子油）、「アラキ酒」、「マンテイカ」（ラード）、新大陸からの「青タバコ」を治療に取り入れている。また、金瘡書に見られる白膏、青膏、黄膏、赤膏、黒膏の名称はガレノス流の膏薬を思わせるが、その材料と分量はヨーロッパの処方とは異なっている。医療道具として焼灼止血用の「焼き金」および切開用の「ランセイタ（lanceta）」が導入された。フロイス神父が天正13［1585］年に執筆した『日欧文化比較』によれば、日本人は傷口に膠を塗った紙片を貼っていたが、17世紀初頭には「メイチャ（mecha）」と呼ばれる木綿糸を用いた縫合術が普及し始めたようだ。

とはいえ「南蛮流外科」は、一定の数の日本人医師が西洋外科学に基づく共通の教育を受けて一連の問題や基準となる解決方法を共有し、伝承していくまでには至らなかった。

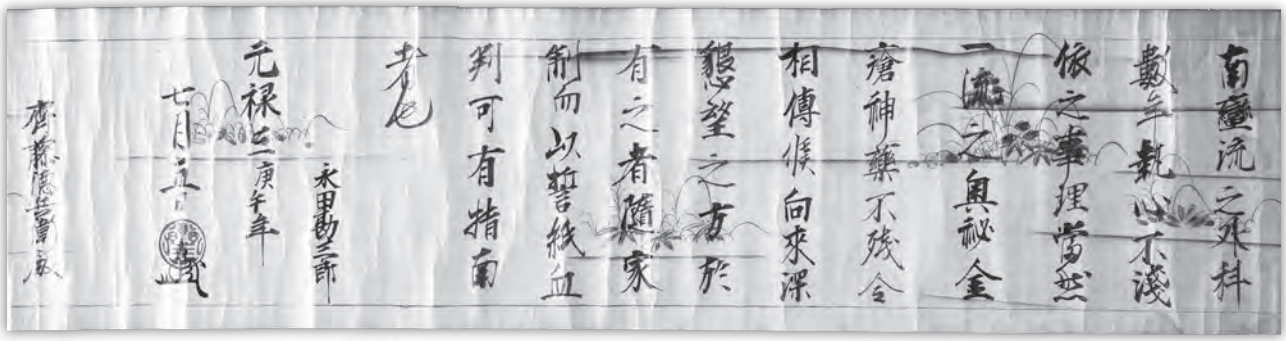

南蛮流之外科
數年執心不淺
依之事理當然
一流之奥祕金
瘡神藥不殘令
相傳候向來深
懇望之方於
有之者隨家
制而以誓紙血
判可有指南
者也
永田勘三郎
元禄三庚午年
七月吉日

図３　医師の免許状：「南蛮流之外科」
（元禄３［1690］年）

3 東西医学交流の舞台となった出島オランダ商館

オランダ東インド会社は慶長14［1609］年に徳川家康の朱印状に基づいて平戸で商館を運営し始めたが、1602年に設立されたばかりの史上初の株式会社内の医療体制はまだ盤石なものではなかった。当初は平戸で病人が出た際には、停泊中の蘭船の外科医や地元の医師に助けを求めたようだ。後に医療従事者の採用試験や『アムステルダム薬局方』が導入され、バタフィア（現在のジャカルタ）の病院および各地の商館における治療の均一性が確保されるようになった。

日欧の継続的な医学交流が始まったのは、オランダ商館が寛永18［1641］年に長崎の出島へ移転されたことと密接な関係がある。商館員たちは出島から出ることをほとんど許されなかったため、新しい商館に常任の外科医のポストが創設された。1641年から19世紀半ばまで、約200人のヨーロッパ人外科医、内科医、ときには薬剤師が、最短でも１年間長崎の出島商館で勤務した。それによって西洋医学がまとまった形で途切れることなく伝達されるための安定した基盤が築かれた。商館の医療従事者は、毎年の商館長の江戸参府に随行することが義務づけられており、幕府の権力者やその側近と接触する機会もあった。

外科医の住居にある医務室とは別に小さな病院があり、７月～11月頃にかけて長崎湾に停泊する会社の船で重病にかかった乗組員はここに収容された。不審な死の場合は、遺体の検視・解剖が行われた。

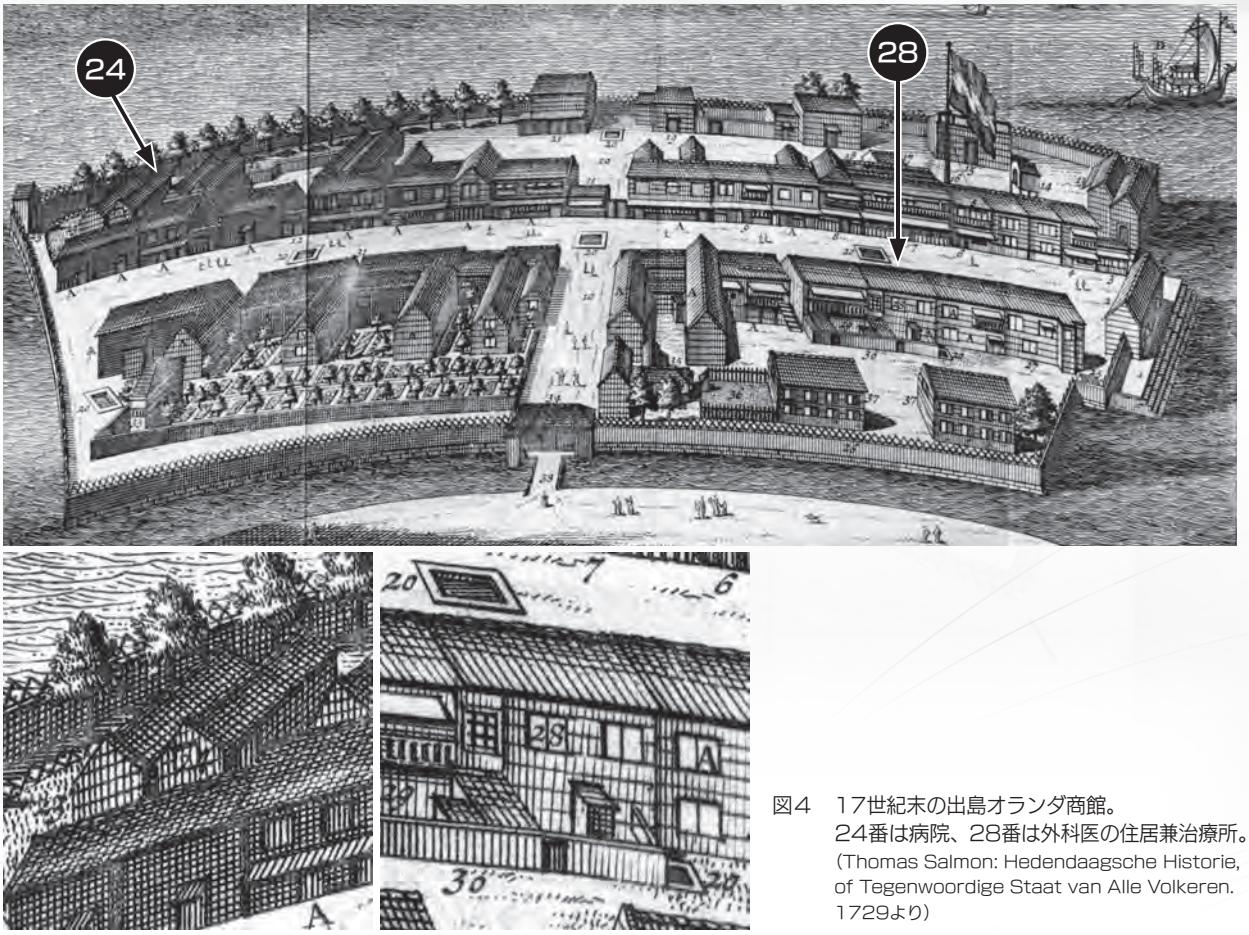


図４　17世紀末の出島オランダ商館。
24番は病院、28番は外科医の住居兼治療所。
（Thomas Salmon: Hedendaagsche Historie, of Tegenwoordige Staat van Alle Volkeren. 1729より）

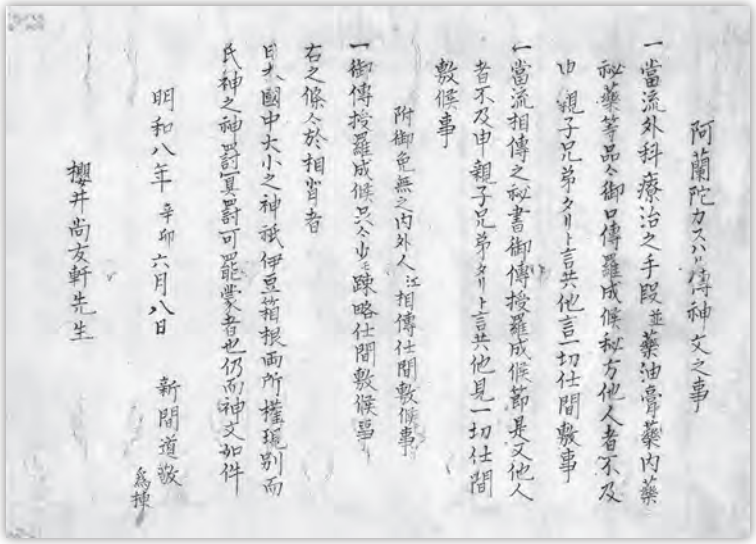
4 カスパル流外科の元祖 カスパル・シャムベルゲル

日蘭医学交流は慶安３［1650］年を境に一気に本格化する。三十年戦争で経験を積んだドイツ人外科医カスパル・シャムベルゲル（Caspar Schamberger, 1623-1706）が特使フリジウス一行の江戸参府中に大目付井上筑後守政重らの注目を集め、10ヶ月にわたって江戸に長期滞在し、幕府の関係者に強い印象を残した。翌1651年から東インド会社は医薬品、医科器械、医書などの注文を継続的に受け、歴代の商館医は長崎と江戸で医学と医療の教授を行うようになった。また、そのような場に立ち会う「オランダ通詞」の中から、猪俣伝兵衛、本木庄太夫、楢林鎮山、西玄甫など西洋医学を志す者たちも現れ、シャムベルゲルの教えを「カスパル流外科」として後世に伝えた。

図５　晩年のカスパル・シャムベルゲル葬儀用の銅版画（1706）

5 「紅毛流外科」の普及

江戸時代の日蘭医学交流において主導権を握っていたのは東インド会社ではなかった。カスパル・シャムベルゲル以降も後任の商館医の大半が江戸の大名屋敷に呼ばれて治療や医学の教授を行った。しかし将軍に拝謁するため毎年参府する商館長一行の江戸での滞在期間は短かったため、1650年代には有力大名の典医たちが長崎へ派遣され、オランダ商館で通詞を介して商館医の指導を受けるようになった。寛永９［1632］年から万治元［1658］年まで大目付として日蘭交流の仲介役を務めた井上筑後守政重や、明暦３［1657］年から天和元［1681］年まで老中、老中首座、大政参与を務め、西洋の科学技術に強い関心を寄せた稲葉美濃守正則も、このような活動を積極的に支援した。出島のオランダ通詞は当時納品された医書をまだ解読できなかったので、商館医たちは約半世紀にわたって本の内容を解説し、医療現場で実際に治療術を見せるなど、紅毛流外科の基盤形成に多大な貢献をした。商館医の教授に基づいて通詞や日本人医師が作成した記録の多くは19世紀に至るまで参照され続けた。



阿蘭陀カスパル傳神文之事

一當流外科療治之手段並藥油膏藥内藥秘藥等品々御口傳羅成候秘方他人者不及申親子兄弟タリト言共他言一切仕間敷事

一當流相傳之秘書御傳授羅成候節是又他人者不及申親子兄弟タリト言共他見一切仕間敷候事

附御免無之内外人江相傳仕間敷候事

一御傳授羅成候共々少も疎略仕間敷候事

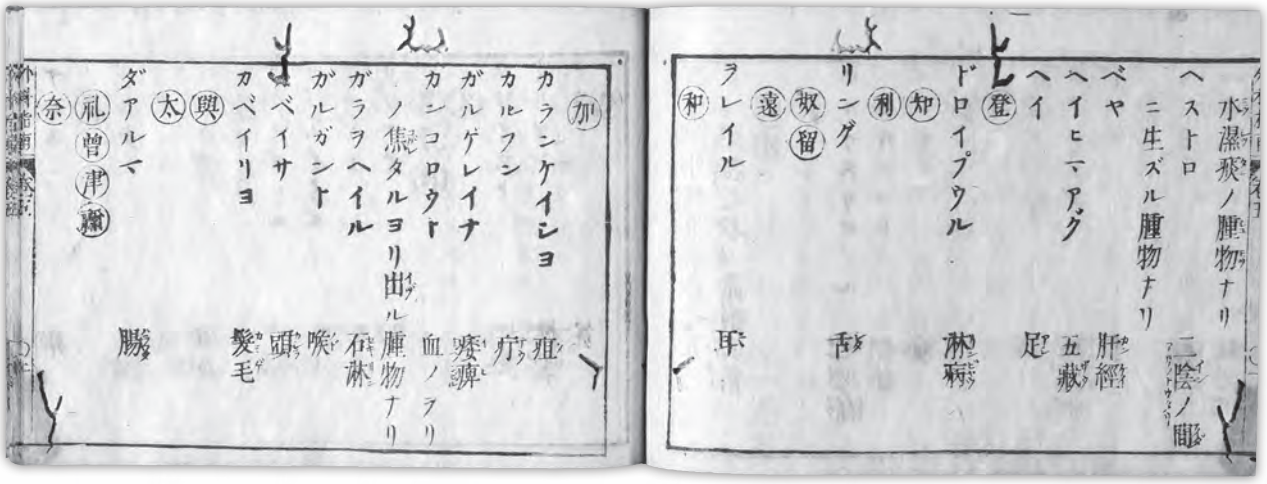
右之條々於相背者

日本國中大小之神祇伊豆箱根両所權現別而氏神之神罰冥罰可罷蒙者也仍而神文如件

明和八年辛卯六月八日　新間道敬爲揮

櫻井尚友軒先生

図6　明和8［1771］年の修行修了書
（カスパル流神文）



水濕痰ノ腫物ナリ
ヘストロ　二陰ノ間
ニ生ズル腫物ナリ
ベヤ　胆經
ヘイヒ、アグ　五藏
ヘイ　足
登
ドロイプウル　脚氣
知
利
リング　舌
奴留
遠
ヲレイル　耳
和

加
カランケイシヨ　疽
カルフン　疔
ガルゲレイナ　瘻漏
カンコロウト　血ノフリ
ノ焦タルヨリ出ル腫物ナリ
ガラヲヘイル　石淋
ガルガント　喉
ベイサ　頤
カベイリヨ　髮毛
與
太
ダアルヽ　腸
礼曽津禰
奈

図7　体液病理論、腫物の診断と治療、膏薬方、薬草の効能、各種疵の手当て、学術用語（カタカナ表記）の解説などをまとめた『阿蘭陀外科指南』宝永2［1705］年刊

6　資源調査と蒸留術の移転

財政状況が厳しさを増す中、寛文3［1663］年に「女中衣類直段之定」が定められ、生活必需品以外の消費を抑制する流れが強まり、動物、楽器、時計、赤珊瑚など高価な品々の輸入も禁止された。しかし、医薬品の輸入制限は医療現場でさまざまな問題を引き起こすおそれがあるため、国内で生産や製薬が行えるようにする必要があった。寛文7［1667］年には「皇帝（＝将軍家綱）と帝国顧問官は、植物学と薬油蒸留に詳しい人物が日本へ派遣されることを望んでいる」との要請が新商館

長シックスと前任者のランストに伝えられ、また蒸留器と繁殖用のさまざまな苗の注文も出された。「帝国顧問官」とは、かつて外科医カスパルの治療を受け、西洋医術の導入を積極的に進めていた老中稲葉正則である。

バタフィア総督府は幕府の要請に素早く反応し、翌年から数年にわたって薬草の種子と苗を送り、調剤助手ヘック（Haeck）、薬剤師ブラウン（Braun）、さらにこの任務のためにオランダで採用された「医学博士、薬草熟知者、蒸留師及び化学者」ヴィレム・テン・ライネ（Willem ten Rhijne）を次々と長崎へ赴任させた。この３人は日本人とともに長崎近郊の山野での薬草調査を実施し、納品された種苗に関する説明を行った。彼らが見つけた約50種の有用植物の記録は長崎奉行に提出された。

寛文11［1671］年にブラウンは持参した蒸留装置を幕府の経費で建てられた「油取家」に設置し、茴香油、丁子油、肉豆蔻油、樟脳油など一連の薬油蒸留法の教授を行った。参加した日本人はその製薬法を短期間で習得した。舶来薬草の栽培は知識不足や異なる気候のために期待された成果は上がらなかったが、薬油蒸留の技術移転は成功した。また日蘭合同の薬草調査によって、中国の本草書の知識だけでは日本の植物を十分に把握できないことが判明し、日本独自の本草学への布石となった。

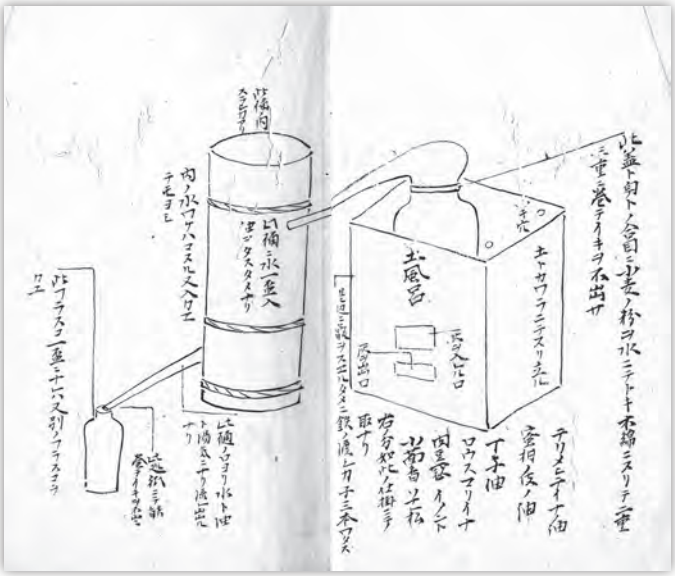


図8　寛文12［1672］年に出島に設置された蒸留器
（「蘭方秘訣」書写者不明、江戸中期）

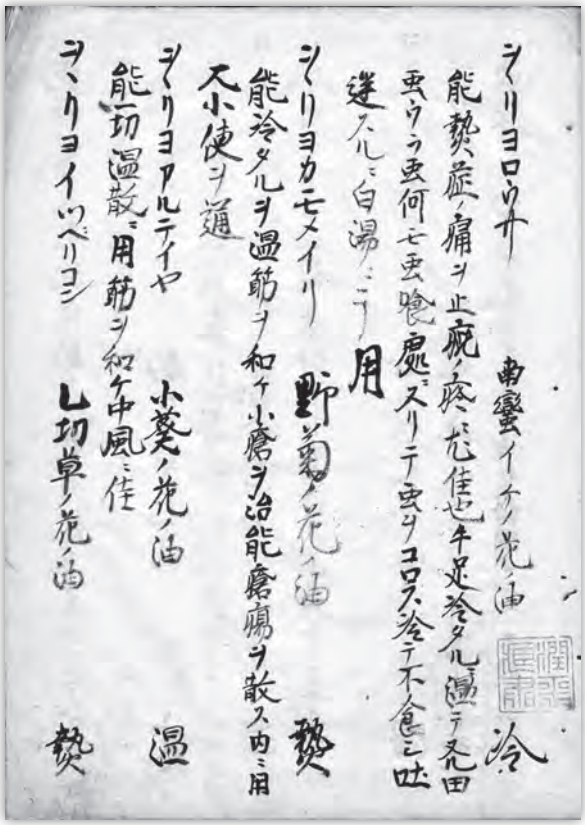


図9　長崎近郊の合同薬草調査の報告より
（「蘭方草木能毒集」書写者不明、江戸中期）

7 ヨーロッパへ伝わる「東洋医学」

出島商館の西洋人医師たちもさまざまな収穫を得ていた。もともと医学の教授や日本人患者の治療、医書や医療道具などの供給は、生糸や各種織物を中心に行われていた日蘭交易の「潤滑油」に過ぎなかったが、商館医の中には、日本の生薬や治療法に目を向ける者もいた。やがて、いわゆる東洋医学に関する情報は、中国よりも先に日本から西洋へ伝わるようになった。19世紀中頃までにヨーロッパで発表された「東洋医学」関連の約240点の書籍、論文、報告の７割以上は、日本での観察や日本で入手した資料に基づいて執筆されたものである。

灸術に使用されるモグサは「Moxa」として各言語の語彙に定着し、鍼術では中国の捻鍼法とともに、日本人が開発した管鍼法と打鍼法が「acupunctura」として紹介された。「経絡」、「気」、「虚症」、「実症」などの概念の理解は西洋では困難を極め、誤解もあって鍼術はあまり評価されなかったが、灸術に関する事例報告と代替品の研究は半世紀以上も続けられた。また、アカネ科植物の葉や若枝から抽出され、止瀉、止血、化痰などの効能を持つ阿仙薬は「Terra Japonica（日本の土）」の名称で取り引きされ、富裕層が飲んでいた玉茶という緑茶は「皇帝の茶（Keysers Thee）」として高評を得た。

老中稲葉正則の依頼で薬草調査を行った薬剤師ヘックとブラウンが長崎近郊の山野で見つけた有用植物のリストはバタフィアにも送られた。香辛料などの植物の取引で財を成してきた東インド会社の商人たちは日本の植物も交易品として検討したが、当初は苗の輸出許可は得られなかった。ブラウンらのバタフィアでの上司だった医師クライヤー（Andreas Cleyer）が、後に出島商館長として日本の植物調査を続け、薬草と観賞用植物の報告、標本、種をヨーロッパへ送り、西洋人による日本植物研究の基盤が築かれた。クライヤーとともに来日した庭師マイスター（Georg Meister）は、1692年に発表した『東洋的・インド的園芸師』において一連の植物を紹介し、日本の庭園についても初めて詳しく紹介している。

元禄３［1690］年に来日した内科医エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）は、それまでの鍼灸に関する情報を整理・補完する画期的な論文と、植物学の基礎を築いた『日本植物誌（Flora Japonica）』を発表した。ケンペルの『廻国奇観（Amonitates Exoticae）』および『日本誌（History of Japan）』は日本研究の基礎文献として高く評価され、研究のよりどころとして19世紀まで重要視されていた。

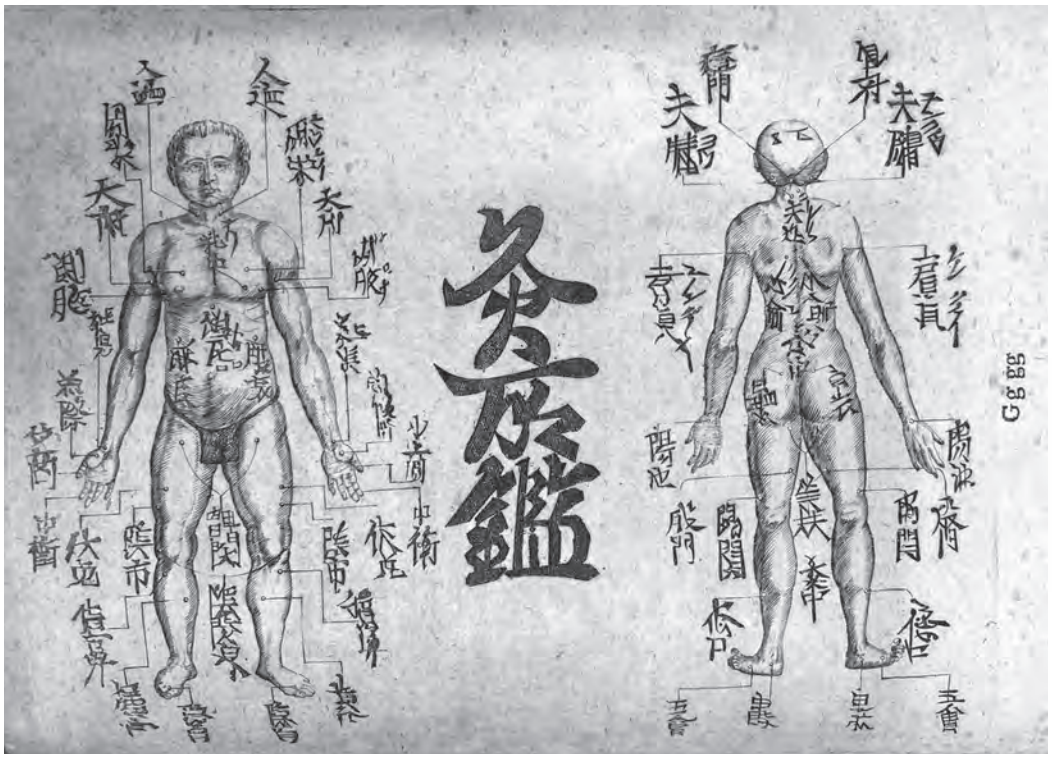


図10　ケンペルが日本で入手した「灸所鑑」
(Engelbert Kaempfer: Amoenitates Exoticae. Lemgo, 1712.)

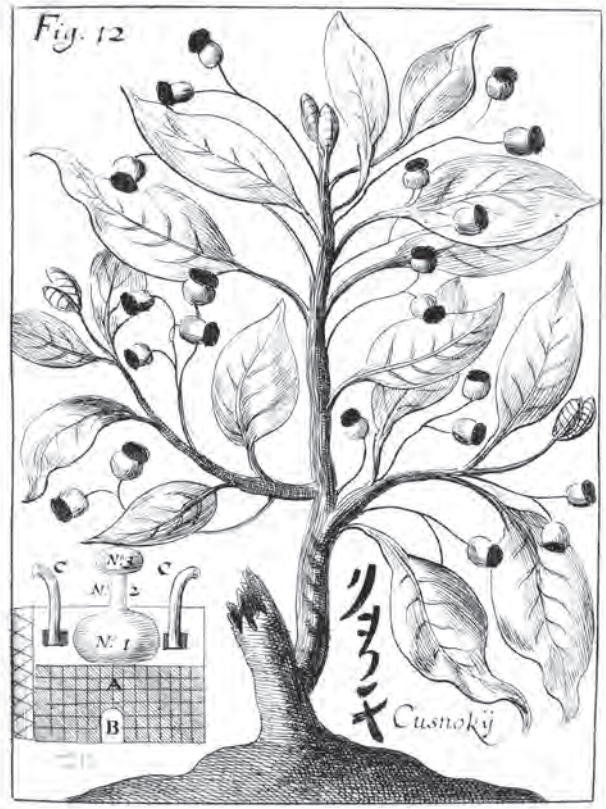


図11　クライヤーによるクスノキおよび薩摩地方の樟脳製造釜（水蒸気蒸留）
(A. Cleyer: De Arbore Camphorifera Japonensium Kusnoky dicta. Miscellanea Curiosa, Decuria II, Annus X, Observatio 37,1692.)

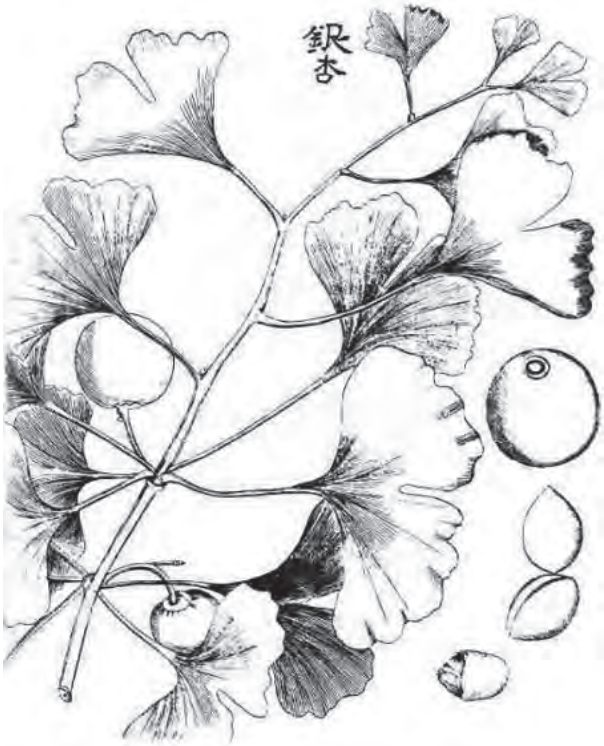


図12　“Ginkgo, vel Gín an, vulgò Itsjò”。ケンペル「日本植物誌」より
(Engelbert Kaempfer: Amoenitates Exoticae. Lemgo, 1712.)

参考文献

青木歳幸［ほか］編『洋学史研究事典』思文閣出版、2011

エンゲルベルト・ケンペル［著］今井正翻訳『日本誌：日本の歴史と紀行　上巻，下巻』霞ヶ関出版（発売）、1973

古賀十二郎『西洋醫術傳來史』形成社、1972

古河歴史博物館『日本の解剖ことはじめ：古河藩医河口信任とその系譜』古河歴史博物館、1998

關場不二彦『西醫學東漸史話』吐鳳堂書店、1933

宗田一『図説・日本医療文化史』思文閣出版、1989

長崎市出島史跡整備審議会編『出島図：その景観と変遷』長崎市、1990

長崎大学薬学部編『出島のくすり』九州大学出版会、2000

長安高啓明著；石澤一未英文要旨『長崎出島事典』柊風舎、2019

原三信編『蘭方医三百年：日本最初の西洋解剖書の翻訳と十七世紀の蘭方外科』原三信蘭方外科免許三百周年記念会、1985

原寛著『博多に生きた藩医：原三信の四百年』石風社、2014

ルイス・フロイス著；岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店、1991

ヴォルフガング・ミヒエル編著『ヘルマン・ブショフ：痛風に関する詳細な研究及びその確実な治療法と効き目のある薬剤について：ヨーロッパにおける灸術に関する初の著書（1676年英語版）』九州大学大学院言語文化研究院、2003

W・ミヒェル，鳥井裕美子，川嶌眞人共編『九州の蘭学：越境と交流』思文閣出版、2009

ヴォルフガング・ミヒェル，吉田洋一，大島明秀編『史料と人物 Ⅲ（中津市歴史民俗資料館分館医家史料館資料叢書10）』中津市教育委員会、2011

ミヒェル・ヴォルフガング「シーボルト記念館所蔵の「阿蘭陀草花鏡図」とその背景について」『鳴滝紀要』17, 2007, 9-38

若木太一編『長崎・東西文化交渉史の舞台』勉誠出版、2013

山田慶兒，栗山茂久共編『歴史の中の病と医学』思文閣出版、1997

Engelbert Kaempfer: Heutiges Japan. 1,2. - Kritische Ausg. München : Iudicium, c2001.

Engelbert Kaempfer: Der 5. Faszikel der “Amoenitates Exoticae” - die japanische Pflanzenkunde. Herausgegeben und kommentiert von Brigitte Hoppe und Wolfgang Michel-Zaitsu. Olms-Weidmann, 2019

Eva Kraft: Andreas Cleyer. Tagebuch des Kontors zu Nagasaki auf der Insel Deshima 20. Oktober 1682 - 5. November 1683. Bonn 1985

Wolfgang Michel, Elke Werger-Klein: Drop by Drop - The Introduction of Western Distillation Techniques into Seventeenth-Century Japan. 『日本医史学雑誌』50（4）, 2004, 463-492

Wolfgang Michel: Von Leipzig nach Japan - der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger（1623-1706）. Iudicium, 1999

Wolfgang Michel: Traditionelle Medizin in Japan - Von der Frühzeit bis zur Gegenwart. Kiener, 2017

講演会

「17世紀の日欧交流における医学と医療」

2022年10月27日（木）15:00–

九州大学医学図書館（病院キャンパス）1F アクティブラーニングルーム

講演者 ヴォルフガング・ミヒェル 九州大学名誉教授

対面・オンライン同時配信

入場無料・要事前申込

https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/events/michelcollection

九州大学医学図書館グランドオープン記念
第59回 九州大学附属図書館貴重文物展示

17世紀の日欧交流における医学と医療

会期

2022 10/6(木)-2023 3/31(金)

平日9:00-17:00

会場

九州大学医学図書館(病院キャンパス)
1F展示室

電子展示

https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/exhibition/michelcollection

企画構成

ヴォルフガング・ミヒェル
九州大学名誉教授

17世紀の日欧交流における
医学と医療 図録

発 行 日　2022年10月6日

編集発行　九州大学医学図書館
〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1
https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/libraries/medical

印　　刷　城島印刷株式会社
〒819-0012 福岡市中央区白金2-9-6

九州大学附属図書館
Kyushu University Library